

仙川教会代務者 大串 眞

明日1月8日で兄、大串肇がなくなってちょうど一年になります。その直前の1月6日金曜日は仙川教会役員会で、わたしが代務者となって兄は、再再発となった癌のさらに厳しい治療に取り組むことになっていました。そしてその3月末には、仙川教会を辞任、大学も辞職することも役員会で話されていました。役員会としては承認していました。ところが本格的な治療になる前に亡くなってしまったのです。わたしは、この前日の7日の土曜日、ほかの方の葬儀の司式を都内でしていました。その方も教職、牧師でした。そしてすぐに、兄の葬儀となっていきます。また代務体制となっていきました。あれから一年であります。悲しみや喪失感というものは後から、じわーとやってきます。そして代務をしている時に気付きました。それは主任担任教師を失った仙川教会にとって、これは大きな試練だったことを。特にご年配の方々には堪えました。しかし、皆さん、なんだかんだいって、ようやく一年となるのです。次月の2月4日は故大串肇牧師の記念礼拝として改めていたしますが、今日こうして最初にお話ししたのは、長く暗いトンネルを通ったように思いますが、そのトンネルの出口で出てきたからです。試練のトンネルが続く中でわたしたち、仙川教会は、たくさんの説教者を近隣教会から派遣していただき、多くの祈りに支えられながら、とにかく礼拝を守ることがゆるされました。そして、礼拝の中で、特にも御言葉によって支えられて参りました。このことが大きかったのではないのでしょうか。そして、今日の礼拝後には、教師招聘のための臨時教会総会が行われようとしています。今や、新しい出発が整えられようとしております。試練を通して、神様の恵みが現れて、それが形になろうとしています。その恵みをご一緒にまず確認したいと思いました。

また、わたしは、代務者として、仙川教会にお仕えするにあたり、ローマの信徒への手紙をご一緒に礼拝で読む。それを第一のこととして取り組んで参りました。断片的であったこと。また、私の力不足もあって、十分ではなかったかと思えます。しかし、私自身がこの中で教えられ続けたことがあります。それは、福音であります。聖書が明らかにしようとしている福音こそが、わたしたちが立ちもし、倒れもする鍵となっていること。そして、福音に生かされるということを通して、聖霊が働くということ。教会の危機、わたしたちの人生の危機。今は時代的にも、いろいろな意味で危機的な状況があるかと思えますが、その中で、イエス・キリストの福音が与えられていること、そしてその福音をわたしたちは聞いて、力を与えられること。それが、最も大切な中心ではないかと思わされます。そして、ぜひ、今後も、新しい出発をしていく仙川教会において、大切にしていっていただきたい、そう願うのであります。

さて、今日のところに入って参ります。今日与えられました、8:31-39は、ローマの信徒への手紙の頂点、クライマックスと言われるところです。ローマの信徒への手紙は全体で16章ありますから、順序から言うとまだ途上にあります。しかし、内容的には、このところがクライマックスとしての賛歌、頌栄、祝祷でありまして、まるで礼拝の最後の部分のようです。

もうひとつたとえると、登山における山の頂上ですか。1章から始まる神の義の福音すなわち救いという意味では一度頂上に上るのです。頂上で、あるいは峠で、今まで歩んできたところを振り返って見るのです。また、その先の道のりも含めて、下山していく中でいくつかの課題をも眺望しているのです。ユダヤ人問題 9-11章、教会の課題 12-14章、伝道に向かっ

て15-16章となっていくます。

さて、それでは節をおいながら、簡単に確認して行きましょう。

31節 「もし神が味方となっているのならば、誰がわたしたちに敵対できますか。」

ここは、今までの1章から8章にまでの中で、語って来た福音のまとめでもあります。「神がわたしたちの味方」それは、和解の福音ということですね。わたしたちは、それを受けるにふさわしくないにも関わらず、イエス・キリストを信じる信仰によって義とされ、神と和解し、神の子とされた。愛の中で自由に、聖霊の導きによって歩むものとされた。そのことは、神が味方となって共に生きてくださるという確信を得て歩むのです。その確信こそが、わたしたちが信じて生きるということではないか。

さて、この信仰の確信に基づく幸いは、さらに大きな祝福へと広がっていきます。

32節 その祝福は、主に従うならば、必要はすべて満たされるというのです。

いわば、言い換えてみるならば、わたしたちは人生を神様に委ねて、大船に乗ったような心持でいたらよいということです。「御子と一緒にすべてのものをわたしたちに賜らないはずがありませんでしょうか。」これは、肉体的なこと、霊的なこと、すべてのことです。それは全く根拠のない空しい約束、空手形ではなくて、確かな、真実な裏付けがあります。それは、独り子であるイエス・キリストを父なる神はわたしたちのために地上に送っていただきました。そして十字架につけて、わたしたち人類の罪を贖ってくださったのです。その御子を賜ることの中に、神の愛が込められている。それが証拠です。

ヨハネによる福音書はこう語ります。3:16 「神は、その独り子をお与えになったほどに、世を愛された。独り子を信じる者が一人も滅びないで、永遠の命を得るためである。」この神の真実な愛があるならば、わたしたちの人生において、神様が必要なことを賜るのは確実です。ただし、ここで注意が必要であります。このすべてのことは、わたしたちの求めること、願っていること、欲しい物がすべて与えられるといういわゆるご利益信仰とは違うということです。これは神様の御心に適ったすべてのことという意味であって、わたしが中心になって、わたしのために神が奉仕するということではないのです。あくまでも、神様が中心で、神の御心に適ったことにおいてということでもあります。だとすると、人生の苦難や、悩みや、取り除けてほしいと思うものはいろいろあるのですが、父なる神様は、わたしたちに困難な課題であったり、取り除けてほしいと思う人生の棘や十字架があるにしても、神様は、それをよしとされているかもしれませぬ。そういうすべてなのです。ですから、わたしたちは基本的にこう思っておいた方が良いでしょう。「神様は、きっと良くしてくださる。」「わたしたちが信じている神様は悪いようにはなさない。」まだ先のことが見えていない時にも、わからないこともたくさんある黒雲が覆っている時にも、味方となってくださっている神様に事柄をお委ねして、神様が必要と思われることはすべてしてくださる。そう信じて、粘り強く、わたしたちも現実に向き合っていくのです。

33-34節

34節 イエス・キリストは復活され、神の右に座られ、天と地との主となられた。そこでとりなしをしてくださっているというのが、ここで中心的に語られていることです。しかし、ここは、終わりの時のことも射程に入っています。イエス・キリストは復活された後、やがて再臨され、最後の審判をされ、神の国に入るといふ。

「だれが神に選ばれた者たちを訴えるでしょう。誰がわたしたちを罪に定めることができまし

よう。」、日常的にというなら、わたしたちの告発者は隣人ということでしょう。最後の審判というなら検事席に座るのは、サタンでしょう。サタンは、告発する者という意味があります。サタンが訴えるまでもないかもしれません。わたしたちがふさわしくない罪人であることはわたしたち自身がよくわかっています。わたしたち自身の内なる声として、わたしはダメだという。そして、サタンは、そうだそうだ。お前は神の国にふさわしくない。自分はこんなに証拠をたくさん持っている。しかし、イエス・キリストはそこでもとりなしをしてくださいます。とりなしの祈りをしてください。十字架で祈られた祈り、「父よ、彼らをおゆるしてください。彼らはわからずにいるのです。」その祈りが、有効で、わたしたちは、終わりの時の救いに与ることになっている。

わたしたちが努力を続けるならば合格か？NO。わたしたちの信仰がすぐれていないとダメか？NO。ただイエス・キリストの十字架のゆえに、また今も天におられるイエス・キリストのとりなしの祈りによって、わたしたちは、神の国に入ることになっています。

35-39 節は賛歌となっています。ハレルヤと叫んでいます。

神が味方となってくださり、主のとりなしの祈りがあるので、愛を確実にわたしたちは賜っている。将来、与るであろう祝福でもあるのに。現実、すでに、この愛をわたしたちは賜っているというのです。それは神の愛の勝利と表現されています。

「艱難か、苦しみか、迫害か、飢えか、裸か、危険か、剣か」「死」ここで敵についてはいろいろなバリエーションで語られています。興味深いのは、わたしたちにとっていかにも敵らしいと思われる苦難や死だけではないのです。たとえば、「命も、天使も、現在のものも、未来のものも、力あるものも」これらは、一見、敵らしくない事柄です。敵らしくなく、むしろ、味方のように映ることもあるのです。それは、裕福な生活、何もない平穏無事な生活、そういうことも、わたしたちと神様との間を引き裂くことでもあるのです。自分自身の中にその敵が潜んでいるとも言えるかもしれません。そういう誘惑してくることも含めて、わたしたちが、イエス・キリストを通して神の愛の中を歩むことを阻む諸々のことがあります。しかし、最後の決め手は、わたしの側ではなく、わたしを捕らえて離さない真実なる愛の神の御手にあるということです。真実と言うことができるでしょうか。神の愛の真実。神の愛の勝利。わたしたちは、その愛の勝利の中を歩む。歩み通すことができるのです。

「しかし、これらすべてのことにおいて、わたしたちは、わたしたちを愛してくださる方によって輝かしい勝利を収めています。」

勝利を確信し、御名を呼び求め、賛美することへ招かれています。これは、ただ賛美を歌うということだけでなく、生き方として招かれているということです。

愛の勝利をたたえながら勝利の凱旋をする。いや、まだ戦いは続いている中でですよ。まだまだ試練が続く中で、雄々しく、勝利の凱旋をしながら歩いていくのです。

みなさん、それがキリスト者の歩みに現れるのです。ほかならぬわたしたちも、この勝利に与ることがゆるされている。

わたしの仙川教会での代務期間の中で、不思議にも恵まれたことの一つに、求道者の方々と共に歩み、洗礼の準備をし、洗礼式に携わることがゆるされたことです。限られた中でしたから ZOOM という配信でなされました。期間の短い人もいれば、一年近く共に学べた方もおられます。わたしは、その学びを、『新教理問答』を基本的に用いました。これは父、大串元亮が翻訳したことから、この仙川教会の洗礼の準備に用いられてきたものです。私自身も高校生の

時に学んだものです。しかし、その時は、まったくというほど理解していませんでした。この度も、十分にというわけではありませんが、深くとらえられるところがありました。それは、十字架による救いの先に、主の復活と昇天に至るところで、グウーっと力強く迫って来るものでした。復活の信仰。そして、イエス・キリストが万物の主となられるという信仰においてです。たとえば、「世界の希望」というところです。途中からの引用です。「ですからそれぞれ個人個人の生活の中に、単にある転換が起こったというだけではありません。罪と死の問題が解かれたところめでは、わたしたち人類をとらえているのろいの鎖も断ち切られているのです。ここからわたしたちの全世界の未来にとって新しい希望が生じるのです。！」

十分に伝えきれていません。洗礼前の方々とも十分な確認はできませんでした。ですが、この辺りは、説明を超えていることです。圧倒的な迫りが来るのです。そして、ある意味何か突き抜けた信仰というものがあります。それは聖霊による体験の領域です。

わたしたちは復活され、召天されて万物の主となられた主のものとされます。そこに聖霊の迫りを感じ、ただただ単純に主の名を賛美する。そういう勝利の凱旋に連なる者となります。わたしは、ここで数々の信仰の先達たちの顔が思い浮かんで参ります。仙川教会の先達も含めてです。残念ながら時間の関係で、洗礼準備の方々とも十分に深めることはできませんでしたが、今後に期待しています。ぜひ覚えておいてほしいことです。私たちがキリスト者として与えられた信仰は、聖霊によった与えられた勝利の信仰であります。堅い岩を打ち砕く力を秘めています。たとえどんなに敵に四方を囲まれたとしても、どんなに困難を背負っていても、それを雄々しく担っていく。それがわたしたちの受け継いでいる聖書的で教会的な信仰です。福音はそのような力をもたらす。信仰を得て歩むということは、何かのおまけにつけ加えることではありません。あってもなくてもどっちでもよいもの、そうではありません。無くてはならぬ唯一のこととして福音を信じて歩む道があります。

仙川教会は、そして、それに連なるみなさんは、福音によって信仰に立ち、雄々しく立ち上がっていただくとことへと招かれています。みなさんがそのように歩まれることを願っています。

祈ります。